

| | |
|---------|--------------------------------------|
| 漢法苞徳塾資料 | No. 276 |
| 区分 | レポート |
| タイトル | メンキン炎症論に言うところの、炎症部に現われる化学因子の化学物質について |
| 著者 | 八木素萌 |
| 作成日 | 1995.12.16 |

オーコタイド類＝セロトニン・ヒスタミン・ブラジキニン・プロスタグランジンなどは局所で産生され、そこで働いては分解される宿命にあるもの。

プロスタグランジン（PG）作用で細動脈が拡張される＝発赤や熱感

ヒスタミン・ブラジキニンは血管内皮細胞収縮させて細胞間隙を拡張し、そこに血漿が漏出する＝腫脹

ブラジキニンが痛覚受容体付近でPGを生成してそのPGが痛覚受容体を過敏にする＝疼痛

PGは多くの種類が発見されている。アラキドン酸から生成されるが、興味深いことはわずかの構造変化で気管支・胃腸管・子宮などの収縮か・弛緩かのような相反する作用を表わす。これは種々の細胞の働きに応じて、最適のPGが遊離されて、生体機能の調節に用いられていると見られる。

興味深い点は交換神経の興奮により、ノルアドレナリンが分泌されるが、PGも生成する点で、PGは逆にノルアドレナリン放出を阻害することも知られている事である。

これは生体のネガチブフィードバックである＝複雑な機能調節作用その他に炎症の修復反応について、「傷害された細胞から、一つあるいは数種類の発育促進物質が遊離されることによって引き起こされる反応である。」とメンキンは述べている

☆鍼灸における生体防衛能力の亢進・白血球増多・消炎作用を裏づける学説であろう